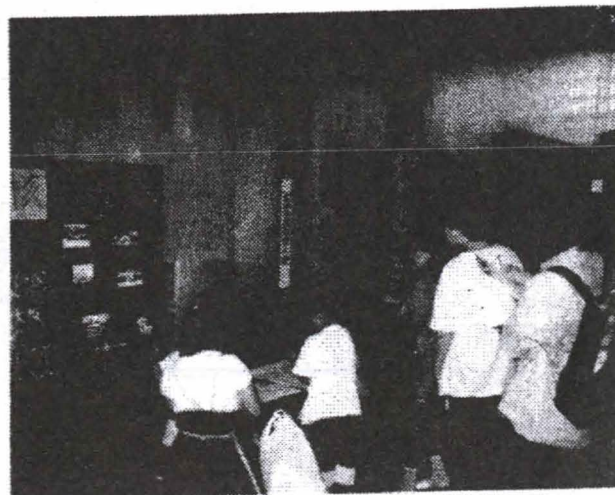


親子で戦争を考える「子どもまつり」

市民・親子連れ300人が集い、

意義のあるひとときをすごしました。!!



会場展示を見る子どもたち

10月18日・神戸市立港島小学校での子どもまつりは、全教神戸市青年部のメンバーが、全国から寄せられた義援金を使って子どもたちによい文化を企画したいと、その実行委員会を呼びかけたところ、他労組青年部や、地域の組織がそれに応え、実現しました。

オープニングは、「メシアとボン四郎バンド」による歌とゲームで一気になややかな気分になりました。青年部の寸劇で盛り上がったところで、戦争をテーマにした構成劇が始まりました。少し難しい内容もありましたが、戦時中の子どもたちの思いに、聞き入ろうと会場は張りつめたひとときでした。

帰りは、戦争中の貴重な展示品などを見て改めて今の平和の重みを感じていた子どもたちにも、この企画の成功を実感しました。

募集!!

全国から寄せられた義援金をもとに、

子どもたちによい文化を

「春休み子ども劇場」実行委員会 に入り、一緒に企画しませんか?

去年は、全教神戸の呼びかけに7団体が実行委員会に入り、劇団こーろによる「まよいねこのもり」を上演し、大成功しました。次回の期待に応えるためにも是非、楽しく意義のあるものを検討したいと思っています。

ご希望の団体・個人の方は、
全教神戸「春休み子ども劇場実行委員会準備係」へ、

11月中にTELかFAXでお知らせ下さい。

追って、「第一回実行委員会の案内」と、「会の趣旨」等をお送りいたします



被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために

強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆



全教神戸市教職員組合「絆編集係」

神戸市中央区下山手通

4・13・9中尾ビル3F

TEL-078-391-7508

FAX-078-391-8549

〒650-0001 神戸市中央区 01170-7-29732

第8号

1998・11・17

市民の声が、反映できる「市会」を!!

「神戸空港」建設の是非

今、神戸市民は、「神戸空港」を建設するかどうか、いろんな情報を市民が知って、しっかり討議をした上で市民に判断させて欲しい、そのための「条例制定」の願いを30万人以上の署名を添えて、出しているのです。市会がこれを拒み、このまま市民

に問う機会を閉ざして「空港建設」に進んだ時、ますます行政に対する市民の不信感がつのる思いです。条例制定に「反対」した市議会議員は、30万市民の声を無視した責任を問われなければならないでしょう。

「大事なことはみんなで納得をして決める」…
(子どもたちは、大人の動きをじっと見ています。)
神戸の未来に責任を持つのは、住民自身です。住民の声を反映できる民主的な神戸市会の姿を見せてほしい…。各市会議員の勇気ある行動を期待したい思いでいっぱいです。

そして神戸市民はそんな市会を必ず作っていくでしょう。30万人の声は、それだけ重いものなのです。

かい
し
市会って
どんなところ?

しがい
しあわ
市会は、みんなの幸せのためにがんばっています…



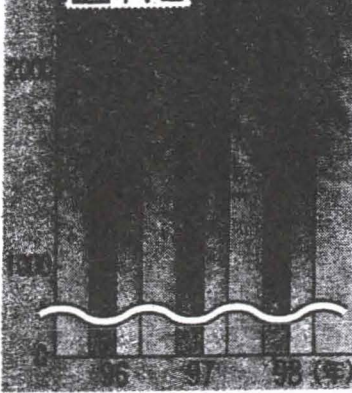
神戸市が発行している子供向け市会パンフ

市会は「せいがん」「ちんじょう」を受けて
みんなの願い実現のために頑張るところ
と紹介されています。

「大事なことは」

みんなできめよう!!



小学生
中学生

被災地の子どもたちは、今

ケアが必要な児童 昨年比272人増

阪神大震災の影響で心のケアが必要な小学生は七月一日現在、兵庫県内で二千四百二十六人に上り、昨年に比べ二百七十二人増えていることが六日、県教委の調べで分かった。小、中学生合わせると、四千六百六人で、昨年比十七人増とほぼ横ばい。県教委学事課は「幼児期の体験が深い傷として残っている上、たび重なる転居や不況による家庭の経済状況の悪化が影響しているとも考えられる」としている。



多く、阪神三百三十六人が「夜尿のくせのある子ども」が続く。増加率が高い学校は、が多いことやけがの発生が被害の大きかった地域が多。頻繁で驚いた」という。被災地では「と話している。

幼児期の体験消えず

一方、心のケアが必要な中学生は前年に比べ二百五十五人減。二、三年生は減り、一年生は増加した。小林院長（児童青年精神科）は「心のケアが必要な児童が多い。医」の話を、小学生は中学生に比べ親の影響を受けやすめられている。

不安定な生活要因か

く、生活の不安定さなどが増加の要因ではないか。幼児期の体験は無意識なため深い傷になりやすいといわれる。大人のサポートが求められる。

県教委調査

震災心の傷 今なお深刻

心のケアが必要な小学生は二年連続増加。約二千四百人のうち新たにケアが必要になったケースは三六・二％だった。地域別では、神戸が二千六十二人で最も

特定できない「心のケア」の必要な子ども

必要な「家庭と学校」の連携

震災3年半経った7月現在、被災地での「心のケア」の必要な子どもの実態が発表されました。（記事参照） 数字で表すと昨年に比べ確かに増加している様子がわかります。しかしこの数字は、子どもがSOSのサインを周りの大人に何らかの形で送りキャッチされたものです。学校で問題として把握していても、保護者には見えていなかったり、担任の見る限り何の問題もない児童が、家庭では親に心配をかけていたり… 子どもの実態を掴み対応するためにも、今後ますます学校と保護者の連絡の大切さを痛感します。

気になる「数字に表れない子どもたち」

そして何より気になるのは、まだ問題を出せないでいる多くの児童の存在です。ケアが必要な児童は、それなりのサインを大人に送っているためその指導が行えるのですが、数字に表れない多くの子どもたちにも、気にかける必要性を強く感じます。

今、学校現場では、決して「特定の児童だけにケアが必要だ」とはいえない実態が見られます。元気に頑張っていた児童が両親の離婚で突然不登校になりかけたり、まじめな良い子が今まで我慢していたためか、いじめを突然始めたり子どもの意志に関係なく、居住の移動が突然行われ、不安な状況になったり… 今まで頑張っていた子どもが突然問題を抱えてもおかしくない現実があります。

「30人学級」実現で、すべての子どもに「心のケア」を…

「心のケアを必要とする児童」の統計は、従前の調査に関係なく、ケアの必要な児童が今後も増える場合が考えられます。言い換えれば被災した児童全体が多かれ少なかれ、心のケアがこれからも必要なのではないのでしょうか？

そのためにも、学校はいつでも安心して自分の不安な思いが出せる所であり、そんな子どもたちを丸ごと受け止められる環境でありたい…と思います。

現在は、「心のケア」の必要な児童が多い学校を中心に、「復興担当教員」がおかれ、その指導を行っています。今後は、全ての子どもを視野に入れた指導・対応が求められます。そのためにも、「30人学級」実現がいよいよ急務になってきました。文部省も、地方自治体の段階で行える方針を出している中で、その具体化が急がれます。

「仮設での出会いを大切に」

グループホームの プロジェクトチームを組んで奮闘中

前号で紹介しました「手水住宅」から、
その後の様子のお便りが届きましたので紹介します。

高齢者・障害者用仮設

ここは高齢の方、障害を持った方のために作られた仮設住宅で、一個ずつ独立した一般仮設住宅と違い、廊下をはさんで両側に個室（1人用4、5畳・2人用6畳）が並び、トイレ・風呂・台所は共用の寮型式になっています。それに集会所があります。

私はここで生活支援員として、皆さんの見守り・生活援助・相談業務を行っています。全室で31戸ですが、今では、公営住宅当選待ちの方、いつかは老人ホームへという方々の10戸となりました。

期限を来年3月と告げられて・

増す不安の中で

震災によって初めて共同生活を経験し、そのプラス面もマイナス面も十分に味わいながら交流を深めてきましたが、この仮設住宅の使用も来年の3月までと告げられています。

高齢であったり、障害をもつ人にとっては、仲間と離れて、また新しい生活の場を求めて移っていくことは、相当に大きな不安となっています。この1年ほどはずっとその事ばかり訴えてこられました。

ここでの生活を

大事にしたい

そうして、いろいろと話し合っているうちに、老人ホームを希望されていた4名の方（88才～91才）が、自分たちの持てるものを出し切って、多少は公的援助も受けながら、ここと同じような家を作りたいという思いをもつようになりました。

独立した住宅でもなく、施設でもない、自分流の生き方をしながら仲間と共に暮らす、病気になったり心配事があればすぐに相談できる者が身近にいるという、ここでの生活をどうしても手放したくないというわけです。

思いを受けて

手伝える喜び

私は、そんな強い思いを受けて、あちこちの専門家の方々に働きかけってみました。検討に検討を重ね、近ごろようやく実現への展望が開けてきました。

「高齢者のグループホーム」です。状況に応じて、ヘルパーさん・ボランティアの方・医療機関その他専門職の方々の支援を受けながら、最期まで自分らしく自分の力で生きてゆけたらとても素晴らしいことだと思います。それを4の方が楽しみに日を送っていること、私がそのお手伝いができることは大きな喜びです。

支援と励ましを

まだ建築費など大きな問題が残っていますが、実現へ向けて「手水グループホームの会」のプロジェクトチームを組んで、大いに頑張っているところです。

手水仮設住宅生活支援員 桑原美千子
（激励・連絡先）Tel・Fax 078-431-6773



神戸市東灘区田中町
「手水」の仮設住宅

（神戸新聞でも紹介されました）

♡ 今夏、仮設訪問した山野さんからのお手紙です。♡

仮設住宅に住む みなさんへ

みなさん こんにちは。体の調子はどうですか？

私は元気です。この前、6年生で修学旅行へ行きました。

すごく楽しかったです。そして今度、全校生でやるバザー集会

「バザールでゴザール」^{セカンド} があります。みんな楽しみに準備をはじめています。

私は学校の委員会や交流委員会もいるので、仮設住宅に行く機会があるかもしれません。そのときはよろしくお願いします。

それでは体に気をつけて下さい。



「大地の学習」をどのように組み立てるか

「地域に根ざし」「地域を学ぶ」という時、

「地域」とはどのような場であろうか。



「地域」とは、全体の中で区切られた部分・区画であり、我々が生活をしているところであるととらえると、地域は「神戸」「西区」など狭い意味の区域を指すだけではないことになる。

地球から見れば日本列島は地域であるし、太陽系から見れば地球は地域であるというようにいくつかの階層構造を持った地域が浮かび上がってくる。次のように特徴づけられる地学的な地域の階層である。

- ① 太陽系の中で第三惑星＝地球は、生物を生み出す条件を備えた水の惑星という特殊性を持った地域である。
- ② 日本列島は、地球の中でもっとも激しい変動帯にあって、特別に地震と火山が多いという特殊性を持った地域である。
- ③ 近畿地方は、日本列島の中では珍しく火山がないが、山地と盆地の列が繰り返す、地形的な特殊性を持った地域である。

- ④ 神戸は、山地と盆地の列の一つである六甲山地と大阪湾の間にあり、高まる六甲山地から運び出された土砂の堆積によってできたという特殊性をもった地域である。
- ⑤ 私の勤務する学校のある榎谷は、200 万年前には大きな湖の底にあり、六甲の上昇に伴って隆起してきた丘陵に位置するという特殊性を持った地域である。

大地の学習で地域という場合、このような階層性を意識して学ぶ内容を構成したい。この時、上位の(大きい)地域の特殊性は、下位の(小さい)地域の普遍性に結びついていることは重要な視点である。また「地域に根ざし」「地域を学ぶ」時に、地域の自然は学ぶ対象であり、あれこれの地学的事象や概念、法則を学ぶための手段のみではない、という側面を重視したい。地域を「使う」対象とのみとらえると「自分の地域には教えるのに適当な素材がない」という悩みが出てくる事が多い。

例えば、地層のことを教えたいのに地層がない。火山を教えたいのに火山がない等の悩みである。予め「教えなければならない」項目や事がらが設定されていて、それに身近な地域の素材を利用したり、あてはめようとする誤りである。それぞれの地域の地形や地質は、何かを教えるために都合よく作られていないのである。

それぞれの地域にはその大地の成り立ち・歴史を反映して、その地域の特殊性を持った地形や地質が存在している。地層が出ていないことも、火山が存在しないことも、その地域の特殊性として意味を持っている。そのような特殊性を含む地域の地学的自然を丸ごと学ぶことは、普遍的な自然の現象や法則を学び、科学的な自然認識を獲得する過程そのものでもなければならない。

地域の大地の学習を組み立てる

中心になる観点は何だろうか。

その一つとして、それぞれの地域の地形と地質の成り立ちを、変動と安定という対立する二つの運動のせめぎあいとしてとらえたい。その一つは、現在も進行中の第四紀の地殻変動、すなわち起伏を大きくする運動である。地球の内部のエネルギーを営力とする動きである。もう一つは浸食・運搬・堆積の過程、すなわち起伏を小さくする運動である。太陽熱エネルギーを営力とする動きである。この二つの大地の運動のせめぎ合いの結果として、現在の地形・地質が形づけられたことを、地域の具体的な事実に即して、リアルにドラマチックにえがきたい。当然、その中で土砂災害や震災などの自然災害の歴史や可

能性、それへの対策などは、このような大地の運動との関連で扱われることになるだろう。そのような動きのある大地の学習では、それを歴史的に理解することを重視したい。また、大地の学習では、大地の歴史の時間的スケールと日常的なスケールの違いを知ることも重要なことである。

大地の学習は、時間的・空間的スケールの大きさから他の理科の分野に比べて、実物に触れたり、実験が行いにくいために一方的な伝達のみ学習になりがちである。しかし、可能な限り子どもたちが自ら自然に働きかけながら学べる実験や実習、観察の開発に力を入れることは大切な課題である。

今回は、「地域を対象にした研究と教材化」・「地域防災の中での学校」を掲載します。